

ISSN 0288-139X

水草研究会会報

66号(1999年3月)



Bulletin of Water Plant Society, Japan

No. 66 (Mar. 1999)

水草研究会

— 目 次 —

下田 路子・宇山 三穂・中本 学：深田の植物—敦賀市中池見の場合— …………… 1

津久井孝博：栽培条件下におけるオオアブノメ *Gratiola japonica* Miq. の茎と花の観察 ……10

木村 保夫・鈴木 正幸・大野 啓一・高久 景一：
タコノアシの生活史と異なる水分条件に対するその成長特性 ……………15

久米 修：香川県のイバラモ属 ……………19

森 由紀：沖縄県石垣島における水草の現状 ……………24

神谷 要：阿寒湖で見つけたイトクズモ (*Zannichellia palustris* L.) の切れも ……………33

新刊紹介 ……………14, 34

【表紙写真】川は生きているか？（兵庫県加古川市 加古川，1998年9月）

天野礼子著『川は生きているか』 昨年，岩波書店から出版された本のタイトルである。水草を調べながら日本の川を回っていて，私も同じ気持ちになっている。魚が減った，水草が消えたの問題ではない。川が川ではなくなってしまうつつある，という実感である。

このような指摘は今に始まったことではない。私の学生時代（20年以上前），当時，京都大学でアユの生態を研究しておられた川那部浩哉さんが，「近頃の川は面白くなくなった，ただの排水路や」としきりに言っておられたのを思い出す。当時は水俣病やイタイイタイ病に代表される「公害」問題が大きな社会問題になった時代で，水質汚濁への関心は高まった。そして水質汚濁対策は大きく進展したかにみえる。しかし，河道の直線化と河床の平坦化を進める河川改修工事やダムの建設で河川環境は変貌を続けた。中洲の「樹林化」，洪水という攪乱に依存して生きる河川敷特有の植物の減少など，いくつかの問題点が指摘されている。そして今，河川的环境保全と自然復元がようやく重要な課題として注目されるようになってきた。しかし，その裏で進行してきた川の病は，簡単には癒せないほど重篤なのではないか。

写真は，1級河川加古川本流の昨年9月の姿。川の中心部にも水がない状態である。上流部で取水過剰ということだろう。こんな状態が長い間続くのであるから魚も昆虫も暮らせない。水たまりに取り残された魚たちもサギの格好の餌食になってすぐに消えてしまう。これはほんの一例。水草もここ10年間で見る影もないほどに減少した。河川敷の植生には「自然復元」の目が当たり始めたが，水の中の植物にも目を向けなければならないと思う。危機は一層深刻である。

〔写真と文 角野康郎〕